

巻頭言

21 世紀社会デザイン研究学会誌

Social Design Review

創刊にあたって

私はここ数年、これからの社会がどうあるべきかを考えるひとつの切り口として「社会デザイン」という概念を提唱してきました。近代社会の社会規範、行動様式に疑問符がつけられ、また実際に日常生活のレベルにおいてさえ不確定性と不安の意識が広がった今、社会がどのような力によって、どう動いているのか、そのメカニズムを理解しなければ、社会組織を運営することも、社会を変えていくことも不可能です。ここでメカニズムということばを使いましたが、実は、社会は機械仕掛けで動いているものではありません。どの社会も、社会の深層を規定する象徴構造といったものをもっています。象徴構造は、しかも精緻でかつダイナミックな特徴をもっています。社会デザインとは、この象徴構造を読み解き、また単に読み解き分析するだけでなく、社会のパラダイム転換を促し、新しい規範、新しい行動様式を追求するダイナミックな営みである、と考えてきました。

話をすこし具体のレベルに戻して考えるならば、世の中がグローバル化しフラット化するに伴い、社会の組織形態はネットワーク型に変わりつつあります。私なりの言葉で表せば「自立型共生の道」を求める動きが強まったということでもあります。個人であれ、企業であれ、そして国家であれ、自立し、かつそれぞれの立場でネットワークを組めば、個人の生き方も、企業風土も、そして社会も変わっていくのではないかとことです。

こうした流れを象徴するかのように、20 世紀末になって日本でも、また世界でも、ネットワークに重きをおく非営利の活動の必要性が注目され、現に非営利組織と国や自治体、企業が協働して社会を変えていく動きが加速度的に広まりつつあります。企業の CSR 活動も、また日本だけでなくアジアの NGO を中心に広がりつつある「社会的企業」と呼ばれる動きも、その流れの中にあります。CSR ではかつてのメセナやフィランソロピーの担った文化支援の面だけでなく、人権からジェンダー、環境、そして雇用に至るまでの幅広い分野での社会的責任が求められています。今年の 8 月、ダッカ（バングラデシュ）で社会企業家として活動するモハマド・ユヌス氏に再会しましたが、彼は社会的企業とは何かを「他者のためのビジネス」と明快に定義しました。しかし、同時に、国家やグローバル企業の代行や下請けをするのではなく、あくまでも、自分たちの意識を変え、行動様式を変え、社会を変えていくことが主眼であるとして、たとえば大手企業がファンドレージングしたお金で事業を進めるつもりはない、と断言したのです。

社会をいくらかでも良い方向に変えていこうという動きや活動の方向性はさまざまです。ですから、ネットワークを提唱し、連携をうたっても、そう簡単に事柄は運びません。21

世紀のグランドデザインを描くことは、ことばでいうほど容易ではないのです。さまざまに異なる、ときには対立するかもしれない多様な考えや立場を、いかに市民社会創成の酵母としていくか。そのためには、議論が大学や研究所などのアカデミックな枠組みを超えて広く社会の各界、各分野の人々へと広がっていき、意見交換の量も質も高まり、研究が持続的に組織される場が必要ではないか。このような考えを福原義春氏（学会顧問、資生堂名誉会長）に打ち明けたところ、私の考えに直ちに賛同してくださり、最初は欠陥だらけであった学会設立の趣旨をまとめ、呼びかけ人代表として「21世紀社会デザイン研究学会」の設立を呼びかけてくれたのでした。2006年6月24日のことです。

学会設立の目的は、学会活動を通じて多様な知が統合され、多くの研究者や実務家が参加し、社会デザインという新しい学問分野において、世界に開かれた幅広い知のネットワークの形成に貢献することにあります。しかし、私たちのネットワークが広がっていくためには、いくつかの関門があります。

関門のひとつは、私たちの学会設立の趣旨が誤解されないようにすることです。21世紀社会デザイン研究学会がとりあえず扱いたいと考える関係分野は、コミュニティデザイン分野、CSR分野、国際協力・平和構築・共生学分野、非営利活動分野、危機管理分野、都市防災分野、文化・芸術組織分野の7分野ですが、私たちの学会の目的は、すでに各分野で活発な活動を展開する先行学会の傍らにミニ学会組織を並置することではありません。そうではなくて、すでに設立総会時に述べたように、これまで各分野で形成されつつある膨大な知的蓄積を領域横断的な知のネットワークに編みこんでいくためのノットあるいはハブの役割を果たすことにあります。多様な知をひとつに結んで、いかに21世紀の新しい社会をデザインしていくか。これが学会の使命であり、課題であるということを、広く理解してもらう必要があると思います。

最近、ベルリンに本拠をおくあるNPOから「世界を見渡しても、社会デザインの名称をもつ学術機関は21世紀社会デザイン研究科しかない。ぜひ、連携して活動したい」とのメールをもらいました。しかし、みなさんごぞんじのように、社会デザインの名称をもつ学術団体であるなら、われわれの「21世紀社会デザイン研究学会」もそうであるし、昨年、設立された立教大学社会デザイン研究所、そして立教大学が「フラッグシップ研究」のための拠点として立ち上げた「アジアにおける知的協働と社会デザイン研究」拠点（Asian Institute for Intellectual Collaboration and Social Design, 略称AIIC）もまた、社会デザインをキーコンセプトに活動を始めた組織です。

学会設立から4年半がたち、学会の会員数は、現在、350名弱。この間、大会を本年度開催予定を含め4回開催し、他に公開講演会、日本NPO学会、日本ボランティア学会、市川房江記念会、立教大学などとの連携セッションを行ってきましたが、学会員みな熱意と尽力によって、ここに学会誌Social Design Reviewを創刊することができました。

創刊号に掲載された論考は、「寄稿論文」が、内山節氏の「21世紀社会デザイン」、および太田達男氏の「市民が担う新しい公益社会のデザインに向けて～公益法人改革の視点から」の2本。そして、13名の方から12本の応募論文を頂戴することができました。応募論文で扱われたテーマは、学会の7分野にまたがる実に多様な問題を対象としており、内容も力強く、示唆に溢れたものばかりです。ぜひ、期待して読んでいただきたいと思います。

最後に寄稿者の方々、および学会誌編集に携わった方々に、心から感謝いたします。

2009年12月5日
21 世紀社会デザイン研究学会会長
北山晴一